

アフオリズムの効用

——ブレイク『無垢の予兆』を読む——

松島正一

一粒の砂にも世界を

一輪の野の花にも天国を見、

掌のうちに無限を

一時のうちに永遠を握る。

ブレイクの神秘思想を説明するためによく用いられるこの詩句は、「無垢の予兆」全体のプロローグであると同時に、要約でもある。ここでは「一」と「多」の同時的把握が、一粒の砂と世界、一輪の野の花と天国、掌と無限、一時と永遠という対立で表わされている。

「天国と地獄の結婚」の中には、有名な「地獄の格言」がある。ここでの諸格言が難しいのは、「国王や司祭の法律が悪徳と呼ぶもの」（『ラファターへの注記』）と「芸術家が悪徳と見なすもの」との間のギャップをど

う捉えるかにかかっている。つまり、「地獄の格言」はあくまでも「地獄の」格言であつて、「悪魔」の視点からの格言なのである。ここからパラドックスが生じる。つまり格言をそのまま字義通り受け取るのではなく、転倒された格言として解釈する必要が生じてくるのである。ブレイクは「悪魔」こそが本当は天使であること、また「地獄」こそが天国であると主張するので、話はんがらがつてくる。「格言」のすべての単語を括弧付きの言葉として受け入れる必要が生じ、ブレイクがどこまで本気なのか（字義通りに受け取っていいのか）、それとも皮肉として受け取るべきなので、解釈が正反対になってしまう。当然のことながら、同じことが「無垢の子兆」でも起こる。

さて、次の四行連句は鳥の比喩で語られる。

籠の中の一羽の駒鳥は

全天を激怒させる。

山鳩と家鳩とでいっばいの鳩舎は

地球を隔々まで震えおのかせる。

ブレイクにとつては、飛行とは世界の自由である。それゆえ飛行の力動性は囚われの鳥を見せられて辱しめを受ける。ガストン・バシユラールは「空と夢」で、「籠の中の一羽の駒鳥は／全天を激怒させる」の予兆を引用し、「鳥は擬人化された自由な空気である」と述べている。ちなみにドイツ語では、「自由」にかんする格

言のなかで、鳥が本来の位置を取り戻して、省略的に「空気のように自由である」とはいわず「空中の鳥のように自由である」（“frei wie der Vogel in der Luft”）と云う。

次に、動物に対する残酷さ、捕らわれの状態にある動物についての一連の対句（二行連句）が続く。プレイクにとって、動物は見る者の精神の形態つまりアレゴリーである。

主人の門で飢えている犬は

その国の滅亡を予言する。

路上で酷使されている馬は

人間の血を神に呼び求める。

「飢えている犬」「酷使されている馬」は乞食、奴隸、兵士などと同じくたんなる動物ではなく、人間の象徴である。「飢えている犬」「酷使されている馬」は、次の「狩られる野兎」「翼を傷つけられた雲雀」のイメジへと繋がっていく。

狩られる野兎の悲鳴の一つ一つは

脳髓から筋繊維を一本ずつ引きちぎる。

翼を傷つけられた一羽の雲雀は

ケルビムが歌うのを止める。

身体が「狩られる」状態は、見ている者からその想像力の一部を奪い、物質性のなかで想像力を外在化してしまふ。見ている者はその精神の存在を切り裂かれ、多様な物質となる。そして見ている者は、人を苦しめる乱痴気騒ぎの自然の女神の支配下に入ることになる。

ブレイクにとつて、「歌うこと」はヴィジョンの世界の抑制を象徴するようにみえる。雲雀は想像的な鳥であるから、雲雀を傷つけることは、天上において鳥に「歌うこと」を終わらせることである。なぜなら鳥は「歓びの限らない世界だが、五官に映る形に閉ざされている」（『天国と地獄の結婚』）からである。鳥は人間によつて包まれたヴィジョンで、「当為」というより「存在」そのものとなっている。

羽根をもがれて戦いのために武装させられた闘鶏は

昇る太陽を恐れさせる。

狼と獅子の吼え声の一つ一つは

地獄から人間の魂を一つずつ呼び出す。

狼、獅子などの暗黒の野獣は、人間の精神の状態を映している。野獣が吼えることができるのは、彼らが足枷をはめられていないからである。我々がその吼える声を聞くことは、彼らを物質的監禁の「心を縛る枷」か

ら解放することである。

ここかしこをさまよっている野鹿は

人間の魂を心労から守る。

「ここかしこをさまよっている野鹿」は自由を象徴し、人間には抑圧的行為の罪はないことを示している。それゆえ野鹿は人間の自由をまもってくれる。

すべてのものは人間存在の象徴であるから、動物の自由は人間の自由であり、動物が捕らわれた状態にあるということは、我々人間が捕らわれた状態にあるということになる。人間は他者を抑圧することによって自己を閉じ込めてしまうことになる。というのは、他者は自己そのものなのだから。

しかし許しの原理がある。許しはブレイクの「永遠の福音」での中心的テーマである。仔羊が人間の形をとったイエスは、自己を与えることによって許しの意義を再構築したことはよく知られている。

イエスの許しと異なり、屠殺人の行為は気まぐれな残虐ではなくて酷使なのである。

酷使される仔羊は公の争いを引き起こすが

それでも屠殺人の包丁を許す。

迷信深い人は蝙蝠を不吉なものと見、ロック哲学信奉者は疑念の象徴として見る。しかしブレイクにとって蝙蝠は、このどちらでもない、とフライは述べている。

夕べの終りにひらひら飛ぶ蝙蝠は

信じようとしない脳髓から出てきたばかり。

夜に訪れる梟は

不信心者の恐怖を語る。

言うまでもなく、蝙蝠は昼は洞窟に住み、夜は外出する生物である。蝙蝠は光よりも暗闇を自分の住家とする。この「予兆」は歴史の暗闇を現実として選び、自己の感覚を閉じることで真の陽光から隠れる人のことも言っている。暗闇への飛行は、夜の森である墮落した世界で自分自身を包囲してしまうか、精神の洞窟の中の光から隠れるかのどちらかになる。夜に訪れる梟は、深淵にむかつてあらゆる方角に無限に広がっている暗い自然の中に囲まれて、知られない神を恐れて問う人間の形である。

ブレイクは「残虐」と「思慮のなさ」の主題に戻り、牡牛を責める者は、決してビュウラの歓楽を享受できないことを指摘する。

小さなみそさざいを傷つける者は

決して人々に愛されないであろう。

牡牛を憤怒へとかりたてた者は

決して女に愛されないであろう。

この予兆は「柔和な人々は幸いである、その人たちは地を受け継ぐ」（『マタイによる福音書』五・五）というイエスの思想と同じ理法である。

さらに、詩人は同じ主題を続ける。

蠅を殺す気まぐれな少年は

きつと蜘蛛の敵意を感じることになろう。

「天国と地獄の結婚」で「生存の一面は多産的、他の一面は消費的である」と述べているように、ブレイクはこの世を「多産的なもの」と「消費的なもの」との闘争と見ている。蠅を殺す気まぐれな少年は、「多産的なもの」（＝蠅）と「消費的なもの」（＝蜘蛛）との間の闘争のアレゴリーである自然、における闘争を粉碎する。ブレイクは「ミルトン」において、人間存在を「世界の建設以前からの選民」（The Elect）「贖われた者」（The Redeemed）「罪人、母の子宮から破壊へと形成された者」（The Reprobate）と三つの階級に分類している。宗教は多産的なものと消費的なもの、これら二つを和解させようとする企てであるが、「選民」を演じる腕白

少年は、相反するものを否定しようとして進む者である。

多産的なものはヴィジョンを生む予言的な人物、つまり「罪人」(The Reprobate)と結びつく。消費的なものは、ヴィジョンに限界をもうける力である。消費的なものは「贖われるべく」(Redeemed)存在しなければ、生産活動と存在は唯我論的で無意味なものとなってしまう。「選民」の残酷さが「贖われた者」の消費的行為と対比されているように、腕白少年の残酷さはそれとなく屠殺人の残酷さと対比されている。同じ類推で、仔羊は多産的なものを代表する。神の仔羊イエスの犠牲はこのことと関係がある。というのも、イエスの犠牲は多産的であると同時に贖罪的でもあるのだから。

残酷さの主題が続く。コガネムシの心を悩ますことは、「エルサレム」の天幕すなわち「現世の殻」(Mundane Shell)、あるいは「偽の木陰」の中に自分自身を包囲するようなものである。この木陰とは、ユリゼンが自分自身の行為によって自分が包囲されていることに気づく木陰である。

コガネムシの心を悩ませる者は

終わりのない夜の中にあずまやを編む。

「あずまやを編む」とは自分のために住み家を準備することである。リットン・ストレイチーはここから「なんと暗い恐ろしいヴィジョン」を喚起されるといふ。

「予兆」は包囲のイメージから、それ自身一種の「包囲」である生物への考察につながっていく。その「包

「罍」とは自然の「藪」の象徴としての「青虫」、母の嘆きにもかかわらず人間がそこから出てくる無垢の状態の象徴である「子宮」である。

葉の上の青虫は

汝の母の嘆きを汝に繰り返す。

蛾や蝶を殺すな

なぜなら最後の審判が近づいているから。

青虫から蛾や蝶への変態。後半の二行は人間の成長を示すだけでなく、無垢からの出現としての人間存在の破壊への警告である。前半の二行は『楽園の門』の「鍵」で「葉の上の青虫は汝に汝の母の嘆きを思い出させる」と動詞が「繰り返す」(Repeats)から「思い出させる」(Reminds)へと変えられて用いられている。また「地獄の格言」(五五)には「青虫が卵を産むために一番美しい葉を選ぶように、僧侶はその呪いを一番美しい飲びにかける」という有名な格言がある。

馬を訓練して戦いにつかせる者は

決して極地の門をくぐれないであろう。

乞食の犬と後家の猫、

それらを養えば汝はふとるであらう。

「極地の門」とは自然からヴィジョンへの扉である。ブレイクは『セルの書』では、これを「北の門」と呼び、そこは精神界への防壁、柵となっている。「地獄の格言」（四四）には「怒りの虎は教育の馬よりも賢い」という格言がある。

次に、中傷 (Slander)、嫉妬 (Envy)、嫉妬心 (Jealousy) の主題が続くが、これらはこの世を毒でおかす非生産的な人間感情である。

夏の歌をうたうブヨは

毒を中傷の舌から得る。

蛇とイモリの毒は

嫉妬の足の汗である。

蜜蜂の毒は

芸術家の嫉妬心である。

人をいらいらさせるブヨは、かん高くうるさい音楽で毒する。ブレイクはブヨの音楽を中傷と結びつける。蛇とイモリは嫉妬を象徴する毒を運ぶ生物である。芸術家の嫉妬心は、まさしく勤勉な蜜蜂の「一刺し」である。

芸術家に関しては「弱い人間は道徳的には十分であるかもしれないが、芸術家には決してなれないだろう」(レノルズ『講演集』への注記) というアフォリズムがある。

乞食と守銭奴という卑しい人間を象徴に用いた次の「予兆」は、実に力強いものである。

王子の衣装と乞食のほろは

守銭奴の財布に生える毒茸である。

金を蓄えることと「乞食の犬と後婦の猫」を養うことは両立しない。毒茸の成長が好むのは暗く不愉快な湿気であるが、利己心の形態はそういう湿気のなかに存在する。富と貧困は本来は同じもの、いや同じ環境の結果であるといえるが、利己心は富と貧困から生まれるものを象徴している。富と貧困の環境は、守銭奴の財布に生えるが、嫉妬の環境からは容易に取り除くことはできない。

以上の、中傷、嫉妬、嫉妬心の主題の「予兆」は、次の二行で「真実は嘘よりも強い」とまとめられている。

悪い意図をもって語られる真実でも

君のでっちあげるすべての嘘を打ち負かす。

そして、下降の必然性が述べられる。

こうあるのが当然だからである。

人間は喜びと哀しみのために作られた。

そして我々がこれを正しく知っていれば

世の中を無事に通り抜ける。

次に、対立は人間存在の枠組みにとって必要であるという認識がくる。喜びは哀しみ、悲嘆、心痛などと対比されている。

喜びと哀しみはうまく織り合わされると、

神性な魂のための衣服となる。

あらゆる悲嘆と心痛の下に

一つの喜びが絹のより糸をつけて走る。

人間は理性が暴君として人間に押し付ける法や束縛以上の存在であるという考えがここには示されている。

赤ん坊は襁褓むつぼ以上のものである。

人間の住むこの国でも

道具は作られたもの、手は生まれたものと

どんな百姓でも知っている。

後半の二行に、斉藤勇博士は「道具や職人がいかように存在するに到ったかは何人も承知しているが、「幼児の悲しみ」や「幼児の喜び」がいかんにして生まれるかを知る者が少いということであろう」(『英語青年』昭和二年八月十五日号)と注記したことがあったが、これに対して、壽岳文章氏は「ここは「道具は作られるが手は生まれる」という処に深い意味がひそんでいると私は考える」と反論している。壽岳氏の主張が正しく、この二行には職人ブレイクの自負がある。

目から流れる一つぶ一つぶの涙は

永遠界で一人の赤ん坊となる。

これは輝く女性たちに捕らえられ

それ自らの歓喜に還される。

これに対して、デイモンは「一つ一つの哀しみは精神的誕生である」と注記している。

次に、

羊の鳴く声、犬の吠え声、唸り声やどなり声は
天国の岸を打つ波である。

そして、マーク・シヨラの述べる「束縛の残酷さと權威の残酷さ」の主題へと続く。

鞭の下で泣く赤ん坊は

死の領土で報復を書き記す。

空中にはためく乞食のぼろは

ぼろになるまで天を裂く。

剣と銃で武装した兵士は

夏の太陽を襲って中風にかからせる。

次に続く予兆は、ブレイクがみた資本主義の原理である。

貧者の一銭はずつと価値がある

アフリカの地の全部の黄金よりも。

働く者の手からもぎ取られた五厘は

守銭奴の土地を売り買いするであろう。

また、もし高いところから守られていたら、

その種族全部を売り買いする。

次は信仰に関して。

幼児の信仰を嘲笑する者は

老年と死に際してあざけられるであろう。

子供に疑うことを教えようとする者は

腐っていく墓から決して出られないだろう。

幼児の信仰を敬う者は

地獄と死に打ち勝つ。

E・H・エリクソンに「玩具と理性」というタイトルの書物があるが、次の「予兆」から採られている。

子供の玩具と老人の理性は

二つの季節の果実である。

自己の知的な力に独善的に自信を感じている懐疑家は、自分自身でどんな満足すべき答をも生み出すことはできない。

いかにも陰険に坐っている尋問者は

決して答えるすべがわからないであろう。

疑いの言葉に答える者は

知識の光を消してしまふ。

ここは後期預言書「ミルトン」の次の箇所を読むと、よくわかるであろう。

常に人を疑うが決して答えられない愚かな質問者をかなぐり捨てよう、

そういう者はずる賢くにやにや笑いを浮かべて坐って、

質問されると策略を用いながら黙って、洞穴の中の盗人のように、

疑念を公表し、それを知識と呼ぶ、そういう者の学問は絶望だ。

そういう者の知識への口実は妬みで、彼の全学問は

がつつがつした妬みを満足させるために老人の知恵を破壊することだ。

（四一・二二〜一七）

次は、社会に対する激しい抗議である。

今までに知られた最強の毒は

カエサルの月桂冠から出た。

何ものも人類を醜悪にはしえない

鎧の鉄の縮金のように。

黄金と寶石が鋤を飾るとき

嫉妬は平和な諸芸にお辞儀をするであろう。

蟋蟀の鳴き声は理解しやすいのか、それとも理解し難いのか。ブレイクはこのような「AかBか」の質問の形式を「楽園の門」〔鍵〕五で「偶蹄の虚構」(Cloven Fiction)と呼んでいる。

謎か蟋蟀の鳴き声かが

疑いに対してはふさわしい返事である。

デイモンは「自然の美に対するあいまいな答あるいは訴えは、疑念がふさわしい答である」と注釈している。我々は経験によって、空間は測定できると思われるが、ヴィジヨンの次元ではこのような考えは成立しない。

蟻の一寸と驚の一里は

びっこ哲学を微笑ませる。

自分が見るものをよりどころにして疑う者は

君が好きなどんなことをしても、決して信じないだろう。

物はそれぞれ、それがどんなに大きくとも小さくとも、どんなに尊大であれ控え目であれ、その中心から花のように広がっている幻想的宇宙の中心である。たとえ真理が笑うためにそこにあるとしても、哲学がこの考えに気づくまでは、それはびっこで笑うことができない。これが「微笑」で述べられている拡大されたヴィジヨンの瞬間の唯一の微笑である。

もしも太陽と月が疑うことがあつたら

それらはたちまち消えてしまうだろう。

太陽の光は、それを捉える器官次第である。その器官は、懐疑的なロック哲学信奉者を代表することはできない。ブレイクが物質的見解とみなすロック哲学では、太陽をガス状の塊あるいは「ギニー金貨に似た火の円盤」として見るだけになってしまう。この世に存在するものは、見る者の精神の形態または投影なのである。太陽を自分自身の精神世界、または神的身体に含まれているものと見るのが、必要なのである。理屈っぽい懷疑主義者は、光の創造者であることを止め、自分が単に太陽本体の燃焼を映し出すものであると思ってしまう。光は単に暗黒、いや少なくともブレイクのエデンの精神の光の墮落のアナロジである。ブレイク神話で、ユリゼンが太陽と同一視されているのを思い出すと、ユリゼンが疑って墮落すると、藪つまり自然の洞窟に包まれた太陽は消えるのである。スパージョン女史はこの二行連句を神秘家の信念をよく表明したものとしてあげている。

ブレイクの「内的―外的パラドックス」への更なる一ひねりが行なわれ、詩人は正直に激怒することが世界を変えることになることを主張する。

激怒しているのは大いにいいが

心の中で激怒しているならよくない。

我々はすべてのもの、天使から岩に至るまでの存在の連鎖が、神性な人間の形の内部に含まれているかのよう

に語ってきた。しかしすべてのものを含むことは人が創造する想像的形態にすべてのものを与えることである。

激怒は精神活動、つまり精神の戦いに想像的に投影されなければならない。抑えられる「激怒」は本物ではない。ブレイクは「激怒」に、想像力における自己のイングランド再建を手助けしてくれるようにと呼びかけている。

輝ける黄金の弓を持ってこい。

欲望の矢を持ってこい。

槍を持ってこい。おお、雲よ、開け。

炎の戦車を持ってこい。(『ミルトン』第一巻)

彼は「無垢の予兆」においても「激怒」を解放する必要を一貫して主張している。

ブレイクは娼婦が存在する英国の現実を非難しているが、性的慣習と商業的価値に対して抗議する。次の詩行は「ロンドン」(「経験の歌」)を思い起こさせる。

娼婦と博徒が国家に認可されたら

その民族の運命は知れている。

街から街への売春婦の叫びは

老いた英国の屍衣を織るであらう。

勝者の歎声と敗者の呪詛は

死んだ英国の柩車の前で踊る。

「街から街への売春婦の叫びは老いた英国の屍衣を織るであろう」はジョイス「ユリシーズ」「2 ネストル」に引用されて有名になったが、シェリーもまた『イングランド人民への歌』(“*Song to the Men of England*”) で激しく人民を扇動している。

そしておまえらの屍衣を織れ、

美しいイングランドがおまえらの墓となるまで。

ブレイクはシェリーのように声高に扇動することはなく、自分の生きているイングランドの現実を正しく認識している。そして詩は再び「喜びと哀しみ」の主題となる。

夜ごと朝ごと

哀れな境遇に生み落される者がいる。

朝ごと夜ごと

快い歓喜に生み落される者がいる。

快い歎喜に生み落される者がいる。
終わりのない夜に産み落される者がいる。

ブレイクは最後まで、目を通して物を見ることの必要性を述べ続ける。

我々は嘘を信じる気にさせられる

我々が目を通して見ない時は

その目は一夜で滅びるように一夜で生み落された、

魂が光の矢の中にいて眠っていた時に。

「最後の審判の幻想」に「私が私の有形のまたは植物的生の目に問わないのは私が景色に関して窓に問わないのと同様である。私は目を通して見るのであって目によってではない」とある。「ヨナ書」第四章十節「あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる」が下敷きになっている。

最後の四行は「無垢の予兆」の結論である。

夜の中に住む哀れな人々には、

神は光となって現れるが、

白日の昼の世界に住む人々には

一人の人間の形をはっきりと表わす。

【無垢の子兆】は円環的な構造をとって終わることになる。G・K・チェスタトンはこの詩の最後の二行こそブレイクおよびあらゆる神秘家の伝承の最良の表白であるとして、ブレイクに関し、他のいかなることが理解されなくても、これだけは理解しなければならない要点であると強調している。

（英米文学科 教授）